

令和6年度第2回市川市地域ケア推進会議 会議録

1. 開催日時

令和7年1月22日（水） 14時00分～15時30分

2. 開催場所

市川市役所第1庁舎5階第3会議室（市川市八幡1-1-1）

3. 出席者

【委員】

山下会長、牧野委員、大野委員、岩松委員、岸田委員、山本委員、鎌形委員、
藤井委員、細野委員、松永委員、横山委員（欠席者3名）

【市川市高齢者サポートセンター】

各高齢者サポートセンター（生活支援コーディネーター含む）から計19名

【市川市】

地域包括支援課 奥野課長 ほか

4. 傍聴者

0人

5. 議事

- （1）令和5年度地域ケア会議における課題（振り返り）
- （2）事例を通じた地域課題に対する対応の検討
- （3）その他

6. 配布資料

- ・令和6年度第2回市川市地域ケア推進会議会議 次第
- ・令和6年度第2回市川市地域ケア推進会議資料

7. 議事録

(午後 14 時 00 分開会)

発言者	発言内容
山下会長	ただいまより、令和 6 年度第 2 回市川市地域ケア推進会議を開催いたします。今回、新たに委員になられた市川市福祉公社細野委員よりご挨拶をお願いします。
細野委員	前任の水野から引き継ぎました、市川市福祉公社の細野と申します。よろしく願いいたします。
山下会長	ありがとうございました。議題（１）令和 5 年度地域ケア会議における地域課題について、事務局より報告をお願いします。 議題（１）令和 5 年度地域ケア会議における地域課題について
事務局	(前年度の地域ケア会議の振り返りと抽出された課題について、配布資料に基づき説明)
山下会長	見守りに関する施策はさらに前からですが、認知症について全国統一で政策を進めたのが 2000 年度過ぎぐらいからなので、本市のサポート体制やサービスについての事務局の説明は、この 20 年程の政策の流れの中で、プログラムメニューが追加されてきたことを示しているところとご理解いただきたいと思います。 そのうえで、認知症がある方もない方でもまだ様々な日常生活上の課題があり、そうした方々へのサポート体制や連携協働推進をテーマに、本日のグループワークを進めるという趣旨ですので、委員の皆さまは今までの施策をご理解いただきつつ、「ここをもう少し知りたい」といったことも含め意見を交わし、わからないことがないようにしてお帰りいただきたいと思います。 今回は初めての試みですが、少人数でグループ構成も工夫して設置されています。あまり堅苦しくならず、話しやすい空気を作っていただきたいと思います。 (事務局から進行について説明後、A～E グループで意見交換) 意見交換後、各グループから発表
山下会長	では、発表をどうぞ。

Eグループ 発表者	Eグループでは「認知症のある方を正しく理解し、協力し合うには」というテーマについて、認知症理解は進んできていると思われませんが、認知症のある方が暮らし続けることを考えると、認知症の人や認知症に関する知識の啓発は大事という話と、やはり住民の中で暮らす以上、クレームなどが出てきた場合に対処の方法を考えていかないと、一緒に進もうという気になれない面も出てくると思われるので、両方必要だと思います。 一方、認知症になることで「受診したくない」といったこだわりがでてくることを、支援者はマイナスにとらえがちですが、これも、本人の意思や家族の中での意向などがあるので、そこをとらえつつ、様々な受診の仕方の提案などを家族の意向も含めて相談に乗っていったら良いと思います。 グループに介護経験のある参加者もいまして「話を聞いて欲しい」とか「吐き出す場があればよかったのではないか」とか、あと相談場所などを知る機会がなかったということもおっしゃっていますので、やはり皆さんが関心を持って声をかけてくれることが重要で、そうした場があることで支援者につながるができるというお話がありました。 あとは、やはり認知症の方も生きてきた中での強みとか、「これをしてきたんだ」ということがあるので、お話を伺いながら、当事者の強みを生かしてどこかにつなげていくという話もあり、そのうえでは、前回の会議で出た移動手段ということもやはり課題であったり、ごみ捨ての話とかも出ましたが、いろいろな課題を聞くことができました。
山下会長	ありがとうございます。では、次のグループはいかがでしょうか。
Dグループ 発表者	Dグループはヘルパー事業者の細野委員と薬剤師会の牧野委員がいらっしゃいますが、前提として、事業所のヘルパーさんたちは地域の中でそうした人に気づいて発信するのは難しく、介護保険制度などでヘルパーとして派遣される家庭でそうした人たちと関わっていくことが多かろうと思います。また、薬剤師さんは地域の中で自分たちが認知症に関して普及啓発というより、お薬などをきっかけとした関わり方がメインとなります。高齢者サポートセンターは相談窓口の機関なので、相談を受けて始まるということが前提です。 こうした前提も踏まえ、できることについて話し合った中、ひとつは、例えば病院や薬局などは待合のモニター画面に様々な情報が流れていたり窓口をやっていたりしますが、そうした画面で認知症啓発などの情報提供をできたらどうかという意見がありました。 また、支援者側の話になりますが、そうした啓発活動のため地域で様々な形で講座を行っていますが、集まる人たちの傾向が似通いがちで偏りがちなので、例えば時間帯や曜日をずらし、週末などを含めてそうした会を

Dグループ 発表者	行った場合にどのぐらい人が集まるのという検証も必要ではないかと思いました。集まる人の傾向や、参加する人たちが変わることによって、周知活動が広がるのではないかとといった意見も出ました。発表は以上です。
山下会長	ありがとうございました。次はいかがでしょうか。
Aグループ 発表者	Aグループは、宮久保台自治会の会長をされている岩松委員や、市川市社会福祉協議会の統括をされてる山本委員がいらっしゃいます。 まず前提としてはご本人のことを知ることが重要で、認知症のことを知ることが必要ですが、ご本人のパーソナルの部分を知ることが大事だという意見が出ました。また、地域の準備として、カバーできるところは地域住民で共有しながらカバーし合うのが良いという意見もありました。 あと、ボランティアさんや我々専門職で、できるところできないところは共有しないとわからないので、1回で済ませずに何回も何回も顔の見える関係を作り、それぞれ何ができるかということ話し合う必要があるという意見もありました。 認知症の講座などに来る人が決まってきてしまうというお話は先ほどもありましたが、地域の住民が集まるところに出向き、ワンポイントの認知症講座のようなこともやるとよいという意見もありました。 やはり、繰り返し地域の方と共有していくということが大事だと思います。以上です。
山下会長	はい、Bグループどうぞ。
Bグループ 発表者	Bグループには自治会連合会の委員とケアマネジャー協議会の委員がいらっしゃいます。 先ほどから、集いの場に参加する方がだいたい決まっているという意見が出ていますが、来られない方たちをどうやって把握して相談につなげていくのかという課題に対しては、集いの参加者に対して「周囲で心配な人、特にごみ捨て等に困っている人はいませんか」といった具体的な声掛けをしてみて把握につなげてはどうかという意見が出ました。 認知症に関する周知啓発は、今後もずっと残っていく課題なので、今できたから終わり、ここの公民館でできたから終わりではなく、続けていく必要があるということ、あとは、新たな取り組みとしてですが、以前あったような「いきいき健康教室」のような集まれるところが、もちろん住民主体でできればいいのですけれども、なかなかそれが難しいという方に対して、ちょっと行政がお手伝いしてくださり、それを継続していくためにも、ちょっと後押しをしてくださるといいという意見がありました。 そうした集まりが1年中できるようなラジオ体操の場とかがあればもち

Bグループ 発表者	ろん良いのですが、ただ運動するだけだとなかなか集まらないので、ちょっとおまけがあるとか、何かもらえるとといったことがあると集まりやすいかもしれないという意見や、あとは、自治会でできることとして、例えば回覧に事例を載せてみたらどうかという意見が出ました。個人情報に触れない範囲内でこんな方がいる、年齢とかこういった症状があるというようなことを、興味を持っていただくために載せてみたらどうかという意見が出ました。
山下会長	ありがとうございます。では、最後の発表をどうぞ。
Cグループ 発表者	皆さんがお話されていることは、ほとんどそうだと思いますが聞きました。Cグループは、民生委員協議会の松永会長のほか、パルシステムの藤井さんという企業の方にもご参加いただいているので、皆さんとはまた違う視点での話も出ましたのでお伝えできればと思います。 パルシステムは職員さんがサポーターの講座を受けられたそうですが、職員さんがサポーターになっただけではなくて、今度、そのサポーター講座を開催する側に場所を提供してくださるといったご協力をいただいたということで、受講するだけではなく次に発展させていくところが素晴らしいと思っており、それがどんどん広がっていけば、私たち認知症地域支援推進員も講座をやるけれど、地域の民間の方にもご協力いただきながら、力がどんどん倍々になっていくのだと感じたので、そうした取り組みが広がると良いと思いました。 皆さんのお話と重なる部分は割愛させていただきますが、行方不明の高齢者に関するメール配信の話題となりました。数日前にもメール配信があり翌朝見つかったという案内が来てほっとしましたが、この登録はどんどん広がってほしく、こういう仕事に携わっているから登録しているのではなく、市民の方々に、例えば先日の猿が出たような情報や、子どもがいなくなったといったちょっと危険な情報、どの世代にも関わる内容は多分あると思うので、メールやLINE配信も若い人にもどんどん登録してもらえよう、ちょっと邪（よこしま）な考えかもしれませんが、保育園入園の手続きに来た人への資料に登録案内が同封されるような形で拡大していけないか、保護者の方に子どもを守る視点で、自分の地域を知ることや子どもたちの安全も考えたときに、認知症の方が外に出てちょっと小さい子に声をかけて不審者として通報されるということが私の子供の学校でもあり、実は認知症の方が道に迷って小学生に声をかけてしまったのですが、認知症にかかわらず不審者対策という部分で、学校にも協力いただけないかという話が出ました。以上です。
山下会長	ありがとうございます。あと15分ほどなので、話し足りなかったことが

山下会長	あれば、少し時間を作りますが、よろしいでしょうか。 こうした企画が初めてなので、事務局から感想をどうぞ。
事務局	今回初めてこの推進会議でグループワークという形を取らせていただいたのですが、皆さん様々な意見を出していただいてよかったと個人的には思いました。 私どものグループでも、個別の事例でこんなことに困っているという事例を共有する機会が大事だという意見が出ました。会議もそうですし、地域の様々な場で、高齢者サポートセンターの生活支援コーディネーター兼認知症地域支援推進員を含め、地域の様々な団体の方々とこうしたことを共有する時間を取っていけると良いと感じました。以上です。
山下会長	ありがとうございました。事務局、高齢者サポートセンターの方もありがとうございます。今回架空の事例というか、よくあるような事例について、事務局がエッセンスをパワーポイントでまとめてくださいますて、委員、高齢者サポートセンターの皆さんとで市川市の地域包括ケア推進について話し合う場にしました。次年度からは、架空事例ではなく、実際に市川市民が直面している地域生活課題について、高齢者サポートセンターの方々がかわられたり、委員の皆さまが関わられている事例を持ち寄り、その方を支える地域を市川市でどのように作ろうとか、地域住民同士、専門職や相談機関みんなで支える支援体制や地域づくりの仕組みを作ろうという事が話し合えればこの会議の目的が果たせると思います。そうした個別の事例を取り扱わず、市川市民の移動支援、市川市民の買い物支援、といった地域課題を本会議で話し合うテーマにすると、そこには行政の予算、担い手の確保、仕組みづくりや運営体制が必要という議論に行きつき、先に進まないことも少なくありません。今日の地域包括ケア推進において、市川市全体で、画一的な仕組みを構想するというのが実際にはあまり馴染まないのです。 たとえば、ちょっと意地悪なこと言うと、高齢者サポートセンターの方々が主に運営を担われている認知症サポーター養成講座は、はじめは勢いよく進めていたけれども、何年も継続していくうちに、委託業務としてやらされているような気になったりしませんか。認知症サポーター養成の運営上の課題は、学ぶ場の機会提供まではできるのですが、その先の地域づくりにまでつながらないと言われていています。その先をどうするかが課題です。つまり学んだ後、何をするかというその仕組みを、皆さんと少し汗をかいて作る、その時に「学んで勉強になりました」といって終わる人と、自分ごとというか、過去にご家族に認知症の方がいらっしゃったり現にそういう方がいらっしゃって「何かちょっとやれるならやりたい」という方が出てくるので、生活支援コーディネーターはその方と協働する、資源を

山下会長	つくっていくとか、出会ったら離さないというコーディネーター専門職と住民との関係性を構築されていくことを期待します。 この地域ケア推進会議は、市川市の地域包括ケアの仕組みづくりや課題解決に向けた資源を創生、調整していくことを議論するのが役割ですが、今後、この会議では、介護予防、介護、医療、生活支援、住まいに関する課題について、高齢者サポートセンター、社会福祉協議会、行政の福祉担当は地域住民や関係機関との協働をさらに図るため、「発見と気づきとつながり」の仕組みを再構築していくことは重要なようです。 「発見」というのはどういうことかということ、それまで知られていなかったことで、それぞれのフィールドをお持ちの方が、実はこういうことが起こっているということを明確にしていくということです。認知症の政策は25年以上進んでいるので、発見の仕組みや、発見する人は増えてきたのですが、問題は「気づき」の仕組みなのです。「気づき」というのは、それまで見落としていたことで、蓋を閉めたり、黙っているものを埋め戻してしまっている状況があることも含めて、気づいたら「行動する」というのが重要で、気づいたら行動するという仕組みを作らなければいけないのです。 認知症問題というのは、ひとりで気づいてひとりで対応するにはもう限界があるほど大きな問題になってしまっていて、例えばコンビニエンスストアで高齢の方がよく利用されているレジの問題が認知症のサポーター養成講座の基本で出てきますが、最近私が気になっているのは、認知症の方なのか若者なのかかわからないですがお手洗いを汚す方がいて、ある地域包括支援センターのケースカンファレンスでは、コンビニエンスストアの方と仲が良く、そのコンビニエンスストアの方が地域のために動くという人ですが、トイレが毎回びしょびしょだということで困っており、でも認知症の方は家でトイレに入るよりそちらの方が安心だから、転んだら困るし、ルーティンになっていて、さすがに解決策が見つからなくて、どうしようという話です。 このような課題に直面した時、その方の認知症の課題、その方の生活課題、コンビニエンスストアで起きたその方々の実態や課題などをとらえて、介護・医療サービスの利用も含め、どのように住みやすい街にしていくのかを総合的に考えてくというのが本会議の役割であろうと思います。つまり、市川市全体でやるのか、高齢者サポートセンターや生活支援コーディネーターの圏域でやるのか、また自治会町会といった小さな圏域でやるのかも含めて、地域づくりをしていけばいいのです。高齢者サポートセンターの方々も、何か「全部解決しよう」「市川市での解決の仕組みを地域ケア会議に委ねよう」という発想に立たないで、ひとつひとつ取り上げていくという期間と協働の実践、対話、協議、を経て、市川市の地域包括ケアというものが成熟していくのだらうと思います。
------	---

山下会長	気づくという点では、本日委員でもいらっしゃる民生委員さんの役割は、かなり期待されています。民生委員さんで住民の困りごとを発見したら高齢者サポートセンターにしっかりつなぐということを徹底してくださっているのです、そういう仕組みは多分できていると思うのです。ただ、つないだ後で、高齢者サポートセンターと行政がしっかり引き受けて解決できているかという、そうでもないというのを民生委員さんがお気づきだと思うのです。そうした市川市民の生活上の困りごとなどを、地域生活課題として地域ケア推進会議でも取り上げていく。年に2回の会議ではありますが、すっきり結論が出ないような地域課題に私たちは向き合っていて、それが今日の議論のテーマである「認知症」「見守り」について、これほど議論が深まったというのは意味があることではないかと思いました。 さて、認知症を正しく理解しようというテーマが一つ目でしたけれど、この正しさというのは認知症自体の病気のことや、その対応の仕方の正しさというのがあるのですが、これは、人間の尊厳を通して認知症について学びながら認知症になっても安心して暮らして地域社会に参画できる市川市にするということだと思うのです。専門家のいう認知症や患者の理解をするということが正しい理解ではなくて、認知症について私たちが学んでいくというのが共通のテーマだと。地域ケア推進会議の構成のメンバーの方々におかれましては、やはり認知症の問題を取り上げた方がよさそうだと思うのなら、来年度の事業計画等で高齢者クラブではどういうふうにするかとか、自治会連合会ではどうするかとか、民生委員児童委員協議会でどうするかということを、ぜひ、何らかの形で、口頭でも良いので盛り込んでいただきまして、それが叶いましたら、情報提供等は、行政や高齢者サポートセンター、生活支援コーディネーター兼認知症地域支援推進員がしてくれると思います。 今日の成果のひとつに、薬剤師会さんのいらっしゃるグループ等での話し合いで、病院の待合室等のモニター画面を使って、見守り、認知症、高齢者施策等様々な情報提供のスライドが流すということも可能なのではないかとすることが明らかになりましたので、地域ケア推進会議の会議体で、認知症についての普及啓発パワーポイントなどを作って、それを医師会・歯科医師会や薬剤師会とか、待合室等に映像が流れるようなPRも良いかもしれないですね。つまり、ご病気があるけれども、要介護認定を受けてない方にとっては、高齢者サポートセンターの窓口はまだ身近ではないので、予防の観点で正しく学ぶというのは、意味があるのです。 次が見守りというテーマ。これは認知症に限らない見守りの仕組みの話なのですが、先ほど事務局が説明してくださったような様々な仕組みができていの中で、たぶん生活支援コーディネーターの方や高齢者サポートセンターの方々が困っていると思われるのが、「もう来ないで」というよう
------	--

山下会長	に支援を閉ざしてしまう人が増えていることかと思います。統計的に研究したわけではないですが、全国いろいろ回ってケースカンファレンスに出るとそれを強く感じます。親族がいるのだけれども、そこと縁を切って身寄りがないという方も含めてです。 関わりを拒否している人たちに、その地域の自治会の方々が、どう関わるかという課題があります。自治会に参画してくださっていればよいのですが、自治会をやめていたりとかトラブルがあったら、もうそこで自治会というネットワークが使いにくくなっており、ご近所付き合いができていないかという、「この人は敵だから」と関係性が閉ざされていた経緯もある中で、身体上に課題はなく介護保険等はまだ使う必要がないため、制度の保健福祉にもつながっていない人がいるのです。そういう中で私たちが発見し気づくのはその方になんらかの精神疾患があったり、周囲との関係を閉ざしたりしており、いわゆるごみ屋敷的な状況になっているといったケースもあると思います。これは、社会的に孤立している状況も考慮しなければなりません。私たちは、「孤立気味だとわかっているんだけど関われない」という方々がこれからかなり増えそうだと感じています。こうした方々はご本人が何か解決したいとか、自分がクライアントだとは思っていないくて、明らかに周囲が「クライアントだ、むしろ困っている。もう何だったら出て行って欲しい」というぐらいに、お隣近所の方は思っている状況が実態としてある場合があります。こうした方々はまだ医療ニーズに結びついてないし、いわゆる要介護認定等の福祉サービスには結びつかないという方なので、どう関わるかがすごく課題なのです。 市川市としてすぐ対策はできないかもしれませんが、もしそういう方々が高齢者サポートセンター経由等で頻繁にいらっしゃるのが蓄積されているのであれば、地域ケア推進会議で共有しながら議論することも重要なテーマになろうかと思います。このようなテーマ設定をして会議を開催しても、もしかしたら何かの関わる接点が見つかるかもしれないし、もしかしたらその方の心が溶けるような出来事に出くわすこともあるかもしれないし、解決策を見いだせないかもしれない、かなり手ごわい人だとなるかもしれません。現在、高齢者サポートセンターではそうしたケースを把握され、個別の検討はされていることと思いますが、高齢者サポートセンターの専門職だけでは支援体制に限界があるということをむしろ明確にして、支援のネットをかけていくというのが大事なのだらうと思います。それは、行政と高齢者サポートセンターと地域ケア推進会議の関係機関とその方をサポートしようとしている地域住民がまずその状況や情報についてしっかりと共有できるような体制づくりを確実にしていくことが基盤として重要です。そして、対応の仕方は、各団体でそれぞれ対応するのではなくて、一連の対応方法というのを話し合うところまで進めて支援の方針を共有し、できることから必要な資源の開発を試みる。その時に、可能な限
------	---

山下会長	り、地域住民の方が参画していただけるなら参画していただく、例えば自治会長さんが参画してくださったり、自治会長さんの指名する福祉の立場の方が参画してくださったり、やはり登場するのが民生委員さんで、民生委員さんは上手に対応されます。市川市の各地域で展開されている見守り活動、特に、住民と専門職が連携する見守りのノウハウを少しずつでも蓄積していくというのが、この見守りというテーマの議論においては重要なのだらうと思います。 さて、話は長くなってしまいましたが、市川市民の生活にはいろいろ課題があるということを議論し解決に向けた仕組みづくりを模索する中で、一番の情報元になるのが、本日参画いただいている自治会町会の方と、民生委員さんと、そして生活支援コーディネーターの方と高齢者サポートセンターの方です。なので、各圏域レベルで個別の事例検討や地域資源の開発などを目的とした地域ケア会議をされているかと思いますが、こちらの市全体の地域ケア推進会議の方でも、個別の事例検討を行うという意味ではなく、市川市民の生活事例で、個々を超えて市民の複数が課題とされているような個別具体的な実際の事例を取り上げながらみんなで考えていくという場を作っていくことが重要なのではないかと、本日感じた次第です。 地域包括ケアの推進を図る際、直面するのは解決しないケースが多いという生活実態、活用できる資源が少ないという実態です。解決しないケースは、埋め戻さないで、つながり続けるという仕組みを作る。これがもしできれば、予測できないものではありませんが災害時の支援が必要となった時、この基盤がすごく活かされることになります。災害時というのは復旧、復興支援において、集中的に、確実に関わり続けなきゃいけないという動きが求められます。平時の仕組みを作っておけば、災害時にどうやってこの被災された方の生活支援や見守りをしていくかという時の資源ともなります。 ちょっと空中の議論もあったのかもしれませんが、今日の会議は、顔の見える関係を作って、それぞれの立場でそれぞれから感じていることを話し合ってもらいました。今後、生活支援コーディネーターの方や高齢者サポートセンターの方が今後地域ケア推進会議の委員のそれぞれに直接ご連絡をすることもあるかもしれませんが、その逆もあるかもしれません。そうした関係性を創っていくバックアップシステムが私たち「地域ケア推進会議」の役割なのです。高齢者サポートセンターの方と生活支援コーディネーターの方が、孤立しないで仕事ができる、連携や協働推進ができるといった、そうした市川市の地域包括ケア推進体制にしていきたいと思っていますところですよ。 時間が来ましたので、事務局に戻します。
------	--

事務局	皆様長時間にわたり、ありがとうございました。議題は以上となりますので、令和6年度第2回市川市地域ケア推進会議を終了いたします。
-----	---

(15 時 30 分閉会)